

第四 學生生活

本項では文科大学および文學部の學生生活を種種な方面にわたつて述べるが、文科の學生といつても京都大學の學生の一部であり、特に文科の學生のみが他學部の學生に比して異なつた生活をしているわけではないので、ここでは學生全體にわたる記述が若干入るのはやむを得ない。またそれは後になる程大學全體の學生生活と密接に關連し影響を受けているのであるから、全體の學生生活を無視することもできないのである。本項の内容はそのような前提のもとに、大體「學部の歴史」の時代區分にならつて敘述されたものであることを豫め了承願いたいと思う。

一 創設のころ

創設された明治三十九年といえは未だ日露戰爭の勝利の興奮さめやらぬときであるが、その戰爭の影響のためか文科大學の建物はかなり見すばらしいものであつた。當時東京大學においてさえ文科大學の學生數は定員に滿たぬありさまであつたから、京都大學の文科に集る學生の數は決して多い筈はなかつた。四十三年の史學科第一回卒業生の手記には「學生は十一名、選科二名にして下級生も無ければ上級生もなく、従つて煩わしき因襲もなければ囚わるべき傳統もなく、凡て自由にして創造的なりき」と記されているように、わずかの志ある學生が集つたのであ

り、勉學の條件から見ればむしろ恵まれた環境にあつたといひ得るであらう。しかし明治末年の圖書館閲覧統計を見ると、法科二二七〇人に對して文科三三九四人で、學内の第一位を占めており、當時の學生が新設大學の意氣に燃えて眞摯な勉強を行なつたことが知られるのである。

もつとも學生の生活は勉學のみに終始してはいたわけではない。由來京洛の内外は名所舊蹟に富み、そぞろなる逍遙にも人は知らず知らずのうちに古典の世界へと導き入れられる。この恵まれた環境は多感な遊子の胸に深い感興を呼び起さずにはいない。勉學以外の生活にも、かれらは京都に遊學する、ただそれだけで、意識すると否にかかわらず、古典についての深い教養を日に日に身につけて行つたのである。

大學には勉學以外の學生生活のために帝國大學以文會および運動會が設けられ、文科大學自體にも學友會が組織せられて、教官學生相互の親睦をはかるよう催しが折にふれ行われた。竹生島・天橋立などの遊覽はともかくとして、大和めぐり、京都御所・桂離宮・修學院離宮・二條城などの拜觀は當時の文科大學生の上に許された特權的なものであつた。

以文會は四十二年、會員相互の親睦をはかり、その知識を「通融」せしめるのを目的として創立されたが、のちに運動會と合併して大學學友會となつた。四十年には學生集會所が建てられたが、この建物は現在に至るまで學生の集會や研究會合のために多方面に利用されている。いまでは餘りにも古色蒼然として陰鬱な感じを與える建物ではあるが、當時としては學生の分に過ぎたものとする教授もあつたというから、學生に歓迎された施設であつたことはまちがいない。

運動會は本學創立の翌年三十一年のころに組織されたが春秋二季に行われた水陸兩大會は滿都の子女の人氣をさうらうものであつた。水上大會は陽春のころ大津の三保が崎で行われ第四師團の軍樂隊の奏樂があり、京都在任の賀陽宮殿下が臨席されるなど華やかな場面が展開された。大會のうちには分科大學競漕の番組があつたが、創設の翌

年には文科大學も代表選手を出してこれに参加した。陸上大會は現在の工學部の建築學教室のある所が運動場になつており、そこで行われたが、やはり文科からは選手が若干名出て法・醫・工の各科の學生と覇を競つた。文科大學のカレッジ・カラーは紫色であり、淡綠色の法科大學に劣らぬ程の聲援が臨設スタンドから送られたという。

當時の學生の下宿は吉田方面が壓制的に多かつたが、一方田中村・下鴨村にもそれらは及んでゐた。大學は元尾張藩の屋敷跡に建てられたものであるが、北白川から銀閣寺にかけては田畑がつづき、聖護院には例の有名な大根畠が擴がつてゐた。京都は日本で最初に電車が敷設されたところであるが、大正の初期に東山線が熊野まで開通するまでは、出町が最寄の停留所であり、木屋町線の四條以北は夜の九時半過ぎには運轉を停止してゐた。従つてリクリエーションに町に出て意氣の昂つた學生は四條木屋町から徒歩で吉田の下宿まで歸らねばならなかつた。下宿といつても旅館風の高級なもの少なく、吉田はともかく田中・下鴨の方面は大抵農家の一間を借り、そこで勉強につとめ、思索や創作に青春のエネルギーを集中させたのである。

なお四十三年の學生學資金概況によれば「一か月十五圓以上二十五圓以下、普通十五圓五十錢にて可ならん」とあり、この學資の程度は大正の初期まで大體變らずに推移したようである。

二 大 正 期

創設期の明治時代を終つて大正時代に入ると、文科大學は内容において一大發展を遂げたが、日本の社會目體にも大きな變動があり、學生の生活もそれにとまつて相當の變化を示した。

大正三年に第一次世界大戰が勃發し、その餘波で物價が暴騰し、大正七年には有名な米騒動が起つた。このよう

な經濟狀況が學生に影響を及ぼさないはずはなく、學生生活は日ましに困窮の道をたどつた。この際、米騒動のもつとも激烈な土地が京都であつたことを特に想起する必要がある。大戦の結末は日本の場合は大正九年の大恐慌となつて現われ、經濟界の不況は深刻な問題となつて社會的にも大きな不安を惹起した。そこへ大戦後の新しい思潮としてデモクラシーとヒューマニズムが歐米より流入し、わが思想界を風靡した。多感で眞摯な一部の學生はこれらに影響されて、一方では社會矛盾の科學的解明に情熱を燃やし、一方では貧苦に喘ぐ勞働者階級を救済するために實踐運動へと身を投じた。

大正七年には京都には勞働者と學生の會合である勞學會が組織されたが、その會の指導者は本學出身者と在學生とである。大正十年のメーデーには學生は制服制帽のままこれに参加しようとしたが、大學當局は狼狽して勞學會に解散を命じた。勞學會の勢力は衰えたが、河上肇博士の指導による讀書會が持たれ、研究は續けられた。かくして大正十二年には同志のものが多く集り、公然たる學生運動の展開とともに京大社會科學研究會が誕生した。この會はそのころ各高等學校に組織された社會科學研究團體の出身者が續續新たにメンバーに加わつたために、十三年四月には會員總數百四十名以上となり、「基礎工事」と稱して熱烈な會員教育運動を起した。十四年七月には學生社會科學連合會の第二回全國大會が本學の學生集會所で開催された。同年九月には同所で京大社會科學研究會の秋季總會が開かれたが、このとき府の特高課長をはじめ川端署の警官が突然會場に乗りこんだ。大學構内の集會に關して公然と警官が闖入したのはこれが最初である。同年の十二月には府の特高課は非常召集を以て京大・同大などの社會科學研究者の私宅を襲い、研究會のプリント・ノートなどを全部押收し、約三十三名の檢束者を出した。翌十五年一月にはさらに三十八名の檢束を行ない、未決に入れ、報道方面の記事の掲載は九月まで禁止された。理由は不穩文書の祕密出版、過激思想の計畫的宣傳となつているが思想の自由に對する彈壓であり、のちに起るファシズムの狂暴化の先驅的現象であることはまちがいない。京大では直ちに學生大會が開かれ、警官の侵入を詰り、大

學當局の蹶起を要望した。一方法學部教授全部および經濟學部教授六名は、研究の自由について當局の無謀を責める長文の聲明書を發表した。一世を衝動したこの事件は普通「京大學生事件」と呼ばれているが、そのうちには文學部の學生も若干交つてゐる。學生の思想運動は他の諸大學でもすでに始まつていたが、京大のこの事件は大正期におけるそれらの學生運動と取締當局の衝突の最高潮を示すもので、これ以後學生生活における取締りは大學の學生監から警察乃至は司法當局の手に移り、警察權力は公然と學園に侵入する傾向を持ち始めたのである。もつともこのような學生運動は京大のうちでも學生總數の五パーセントほどの人びとによつて行われたにすぎないことは注意する必要がある。

大正期の學生層の思想的主流はまず第一に比較的溫和な近代自由主義の思潮であり、これと連關をもちながらその全盛期に達したドイツ哲學系の理想主義哲學である。特に後者は本學の學問に大いに關係しているものであり、見逃すことのできないところであるが、そのことは別項で詳細に述べられているから、ここでは觸れないことにする。とにかく大正期十四年間の學生生活は若干の社會的影響があつたことは事實であるが、大體において學生たちは健全な歩みを進めていたといつてよい。

この期の文科大學の發展の一つのあらわれは學生數が急激に増加したことである。文科大學が開設されてから、大正の初期を通じて學部全體の入學者數は年五〇名内外であつたが、大正十一年には一〇〇名、十二年には一四〇名と漸次増加し、十三年から十五年に至つては一躍三三〇名の多數に飛躍している。

この傾向は學友會の方面にも影響を及ぼしている。京都帝國大學學友會は大正二年三月に從來の以文會、運動會を合併して成立したが、五年にはすでに十一部を有する盛況となり、十二、三年頃からは當時の華やかな政黨政治の影響をうけてその代議員選舉に大がかりな宣傳が行われるようになった。大正十五年以降は秋に運動週間が設けられて東西兩帝大の對抗試合が行われることになつたが、當時第一級のプレイヤーをそろえていた兩帝大の對抗試

合は種目の如何を問わず、その後しばらく學生スポーツ界のみならず、日本全體のスポーツ界に多大の寄與をなしたものである。

秋季陸上運動會は十數年の間中絶されていたが大正十年にふたたび復活した。第一回大會は十一月七日下鴨運動場で舉行された。復活第一回というので當日は盛況を極めたが、翌十一年には文學部も對學部競技に選手を出場させた。成績は最下位であつたが、わずか二百人程しかない學部からの選手であり、しかもそれがほとんど哲學科の二回生であつたことが衆目をひいた。しかも當時の委員の手記によると、最敗者のかれらは翌日から槍や圓盤を購買し、毎週二回この下鴨グラウンドで練習をつづけたという。これこそ勝敗にこだわらずスポーツを樂しむアマチュア精神の發露であり、文學部學生の性格を表わす特筆的事實といふべきであらう。

一方創立記念日の大園遊會は大正十二年ごろに始められ、昭和七年までこれは毎年開催された。特に盛會であつたのは大正十四年五月十七日本學創立二十五周年記念日のもので、この日は入洛中の皇太子殿下の臨席があり、名優尾上松之助の主演する「開城の日の大石」という大ベージュメントが行われた。「フィルムでお馴染の松之助の目玉もこの日は特別に大きく輝いた」と當時の記録は興味深い敘述の言葉を殘している。

三 昭和のはじめ

昭和の時代はすでに知られているように、日本の國が全體として狂瀾怒濤の運命に身を投じた時代であり、學生たちが陰に陽に、好むと好まざるとにかかわらず深刻な生活を體驗した時期である。便宜上「學部の歴史」の例にならない、これを昭和十二年までの第一期、二十年までの第二期、その後現在までの第三期に分つて述べよう。

第一期すなわち昭和の初期は文學部の各講座が最高の充實した陣容を内外に誇つた時代である。創設期に招かれあるいはその後参加した教官はいずれもこの時期にもつとも圓熟した境地にあり、その講筵においても、研究においても哲史文各科を問わず、その學の蘊奥を遺憾なく開示した。當然これらは眞理の探求に熱意のある若い學徒が強く引きつけ、多くの俊才が全國各地から續々と本學部に集中した。現在わが國の文化の第一線に活躍する本學部出身者は數多いが、そのほとんどがこの時期にこれらの教官たちに學生として指導をうけた人びとであることを想起する必要がある。

昭和三年一月には熊野から百萬遍まで、翌四年五月には百萬遍から銀閣寺まで市電が通じ、學生の市内クリエーションは一段と便宜を増した。それのみでなく従來吉田中心であつた學生下宿は北白川・銀閣寺方面に多くなり、書店なども従來の丸太町通は漸次寂れ、銀閣寺道に多く集中するようになった。

當時の日本の經濟状態を見ると、昭和四年（一九二九）の秋に起つた世界的恐慌は日本の輸出産業に大打撃を與えた。政府のとつた金解禁などの經濟政策はこれに拍車をかけ、雇傭は減じ、賃金は低下した。昭和五、六年には物價は暴落し、日本は不景氣のどん底に落ちた。しかし學生は大部分が親元からの送金で生活しており、低物價はこの時期の學生生活を一層快的にし徹底した勉學も、相當激しい享樂も自由であつた。加うるに京都の街全體が特に大學生に寛容である風が學生を一段と意氣軒昂たるものにした。おそらく現在までの京大學生生活史において、この時期がもつとも恵まれた幸福な大學生生活の存在したときであつたであろう。

ただこの時期における就職率は、不景氣の影響もあり文學部においては必ずしも良好であつたとはいわれない。昭和五年の暮に事務室の伊津野主事は就職口開拓のために滿鮮方面まで旅行し、中等教員としてこれらの新天地に發展することを卒業豫定者に勧告している。

大正の末期から昭和の初期にかけての經濟界の不況は、つぎのような點で學生生活に若干の影響を残している。すなわち學生の經濟生活を守るために昭和二年は共濟部が設置されたが、五年ごろには物價の下落に應じて、學内では食堂の食費を値下げし、ノートの値下げを行ない、ついに學外の下宿料部屋代の値下げにまでその運動を及ぼした。當時の下宿生活は六疊間使用者が七二パーセントと壓倒的多數を占めているが、その部屋代は最高十四圓から最低四圓まであり、平均は九圓六十九錢である。川端署管内の宿屋營業組合は世論の攻勢に堪えかね、ついに賄料は月二十五圓を二十二圓に下げたが、部屋代の方がこれに準じて如何ほど値下げを行なつたかは明らかでない。

共濟部の活動は確かに學生經濟生活に好結果をもたらしたが、さらにそれに拍車をかけるものとして學生消費組合が同年十一月に設立された。出資額は一口一圓で當分は學用品・衣料品などを取扱うということであつたが、その價格の低廉さは學生の人氣を高めるものがあつた。しかし學内における揭示は許されず、當時の三澤學生課長の言では公認は與えられないであろうということであつた。課長の述べた理由は共濟部に消費組合を作ろうとしていくときであるからというのであるが、實は組合の首脳部がモスクワ式戰鬥組合に育成することを目標としていたことが眞實の理由であつたようである。一年近くにわたる組合の活動にもかかわらず、大學からは解散を命ぜられ、またその總會には警官の干渉があり、六年の十月に組合はついに解散した。

なおこの年の十二月には共濟部の新食堂が完成し、一日延二千人以上の學生に利用されたが、その價格は朝食十二錢、晝夕食十七錢であり、スペシャルサービスとして鰻井・天井・ライスカレーがおのおの十五錢の驚異的廉價で賣られたが、鰻井だけはさすがに値が合わずにその後若干引上げられた。

またこのころから學生の對外活動の一つとして七條のスラム街にセツルメントが設立され、有志の學生がスラム街の子弟の學習を指導した。これが學生セツルメントの日本における最初のものであることは注目に値しよう。

昭和六年は日本の進路に一大轉換が起された年である。すでに統一を目ざす中國民族は日本の滿洲における勢力

に抵抗を試み始めたが、ついにこの年の九月に滿洲事變が起つて日本の大陸經營は軍部の指導のもとに積極的に強行されることになった。日本資本主義の危機、不況の克服がこの戦争に結びつけられ、金輸出はふたたび禁止され、軍需景氣の發展は雇傭を漸次擴大した。大陸政策は國民の間には認され、強烈な國家主義の擡頭は學生のうちにも種種な形の反響を起した。翌七年の十月には京大滿洲會が發會したが、その發會式には新城總長をはじめ諸教授・學生など六十名近くの出席者を見た。ときおり研究會を催して滿洲事情の紹介に努めたが、大野學生主事は「これは右翼團體ではなく、滿洲國に對する科學的批判と認識をなす團體である」ことを特に強調している。學生間における大陸關係の團體はのちに他にも若干成立したが、この會はその嚆矢をなすものと見てよいであろう。

時局の變化は國家主義の勢力を漸次強めて、自由主義への政治的壓迫にその手をのばして來た。昭和八年四月に本學では瀧川事件が起つたが、それはそのもつとも顯著なあらわれといふことができるものである。この事件は法學部の瀧川幸辰教授が著わした「刑法讀本」の内容が左翼的であり、學生への影響もあるからといふので教授の辭職を文部省が大學に要求したことから始まる。事件の經過をここに詳しく述べることはできないが、結局小西總長の奔走にもかかわらず佐々木惣一教授をはじめ、瀧川教授を含む七人の強硬派の教授が學閥を去り、同時にこれに殉ずる助教・助手があり、學生もかなりの數がこれらの教授について他の大學へと轉じた。法學部では當局の方針が學問の獨立を脅かし、大學の自治を侵害するものとして強硬に反對したが、このことは大學全體の問題として考へるべきものを持つていたため、學生に與えた反響も小さくはない。法學部の學生および卒業生が教授團を支持したのは勿論であるが、他の學部においても學生の運動はすこぶる活潑に展開された。各學部はみな學生大會を開いたが、文學部學生も有志の立ち上りより高代會議（高等學校別代表者會議）を経て學生大會へと推移し、ついに法經文連合學生大會が開催されるまでに發展した。文學部教授會は學生の動搖と活動に對し、六月十四日に休講を宣したが、學生の運動はさらに十六日に全學學生大會を開き妥協的な解決策を拒否することを申し合せ、瀧川教授

復職のための闘争を宣言した。二十日には文學部の學生大會は文學部の全講義のポイコットを決議したが、その決議文には、學部の教授團の妥協的靜觀的な態度を排撃し、積極的に抗争に参加せざる限り受講を辭退するという激しい言辭を連ねている。當時の文學部長は羽田教授であつたが、東洋史專攻の三回生十二名は「學部學生大會の決議に同調して先生の御授業も辭退致します」という決議文を教授に手交した。當時代表として教授に面會した一學生は後年追憶的に記している。「恐慌先生の御託宜を待つ學生二名、先生のはおがびくびくけいれんし、暫く言葉が言葉にならない。おつかないので有名な先生があれ程カンを立てられたこともめつたにあるまいと今に推し測られる程である。」「併しながら結局お前たちの立場もあろうという事で残る一學期最後の演習だけは先生の方からとり止めて下さるといってお計いを承つた。」しかし「扇を持たれた手と頬がいい合せたようにけいれんし、激しい怒りを激しい言葉に現わすまいと努める博士」の態度にわれわれは當時の文學部のあの苦惱のすがたを見るのである。何故かなれば羽田部長はその當時の法學部長を除く六學部長のうちでももつともこの事件解決に努力せねばならぬ立場に置かれていたからである。

文學部の卒業生の就職狀況は十年ごろから從來に比してやや好調をたどつたが、滿洲國の發展とともに漸次滿鮮方面の各地へ就職が増加するのが目立つた現象といひ得るであらう。

四 激動時代

第二期すなわち昭和十二年のシナ事變から第二次大戰の終末までの本學學生の生活は苦難の一語に盡きるであらう。もつとも十二、三年ごろにおいては前期と大差のない狀勢の推移であり、生活に暗さは感じられなかつた。し

かし滿洲事變以來の軍需景氣はようやく物價の高騰を呼び、十四年以後には明瞭に生活諸條件の悪化が表面化して來た。米價は十三年から統制されたが、十四年末には一割五分の大幅騰貴を示し、統制外の生鮮野菜も日に日に價格は騰貴した。下宿やアパートは學生よりは軍需工場の職工に部屋を借したが、學生は大抵の苦情は我慢して從來の下宿に落着かざるを得なくなつた。下宿屋自身にしても家賃統制令下にあるから部屋代をあげることはできない。しかも疊・襖などの値段は一年のうちに五割も騰貴する有様であつたから經營の困難は當然であつたのである。

共濟部の學生食堂を例にとると、昭和九―十二年ごろには朝食十錢、晝夕食のおの十五錢で、味噌汁・漬物・飯などは食べ放題であつたが、十三年の九月にはそれぞれ十一錢、十五錢となり、翌十四年九月にはそれぞれ十五錢、二十錢と値上りした。さらに十五年四月には十六錢、二十五錢となり、喫茶・ランチなどは廢止された。勿論このころには主食は井一杯の盛り切りとなり、味噌汁・漬物なども一椀・一皿に限定されたのである。従つて連續的な値上りにもかかわらず出される食事は内容が漸次質を落したものになつたことはこれまた止むを得ない。

この生活の窮迫化は共濟部における内職希望についても具體的に見る事ができる。十四年四月五月に共濟部に内職の斡旋を依頼した學生は二八一名であるが、これは十三年度全體を一〇名も上廻り、しかも六七名がわずかに就職できただけである。十五年になると四月のみで内職紹介の希望者は一九〇名にのぼり、決定者はわずかに三〇名だけである。また内職の種類にしても従來は家庭教師が壓倒的に多かつたのが、この年から事務員に第一位を譲り、家庭教師も従來の法・經學部の學生より理・工學部學生が數において増加した。前者はインフレーションによる人的資源の不足を示し、後者は理科系への中等・初等生徒の集中的傾向が起つたことを示す。これらの内職希望者は本學全體の學生數から見ると必ずしも大きい部分を占めてはいないが、時局の影響がこのあたりに明瞭に現われたことは注目に値する。

ちなみにこのころの學生の學資を見ると昭和十七年七月の記録では、概略的なものであるが、「六十圓乃至七十

圓が大部分であり、最近に七十圓が多くなつた」と記されている。しかし中には二十五圓、三十圓のものが數十名、五十圓のものも相當多い。もつとも普通のものの平均月額六十五圓の支拂狀況は部屋代（六疊）十二圓、食費三十圓が當てられているが、これは當時としてはぎりぎりの線で、榮養補給のための間食費を十圓とすると残り十三圓が本代と雜費になり、到底餘裕のある生活とはいえない状態である。昭和十年―十二、三年ごろには五十圓乃至六十圓で學生の餘裕ある生活が成り立つていたことを考えると、わずかの年月の間に經濟生活は大きく變動したのである。

十七年の十一月には文學部學友會では例年のごとく學友大會と稱して旅行したが、このときは高松、琴平を経て高知附近に足をのぼした。在高知の小島名譽教授も出席し未曾有の多數の參加者を得た會合ではあつたが、これが戦前の學友會の最後の旅行であつた。

すでに十六年からわが國は米英を敵とする第二次世界大戰に突入しており、十八年六月には文部省では學校戰時動員體制を確立し、各大學では學生は工場・農園などに動員され、増産作業に力を注ぐことになつた。學生は當然在來の使命を徐徐に離れざるを得なかつたが、學園を徹底的に變貌せしめたのは十八年十月以降である。十月二日に法文系學生徵集延期停止による臨時徵兵検査を十月末から十一月初めにかけて行なうことを政府は決定した。それまでの残り一か月を如何にするかについて、本學はこの十三日からこれらの學生に對して午前中講義、午後は心身の練成を行なうこととし、心身練成は軍事教練を當てることにした。その他教授・助教授の引率のもとに護國神社參拜や、グライダー練習などが重ねられて心身兩面における入營への準備教育が行われた。しかして文部省は十二月一日の入營に際し、明年九月に卒業見込のものに對しては假卒業證書を渡し、明年九月に至つて正式に卒業を認めることにした。本學では十一月二十日に農學部グラウンドで出陣學徒壯行式を行なつたが、羽田總長は壯行の辭を述べ、終つて學部ごとに編成された中隊の分列行進があり、音樂部員の伴奏で「海ゆかば」が齊唱された。この

學徒出陣のため、この年の十二月の學内の殘留學生は法學部約一割九分、經濟學部・文學部は約三割で、法文經三學部全體では二割強の比率となつた。

學徒出陣は大學附近の風景にも種種影響を及ぼしている。翌十九年には殘留法文系學生も入營してよいよ學生數が減少し、また入學者も激減した。古本屋も徵兵・徵用・轉業で次第に姿を消し、以前は大學關係者の多かつた有名なパン屋には町の主婦や子供たちが家族團圓の圖をくりひろげ、その出されるパンも品質は急速に低下していつた。喫茶店も姿を消し、残つている店にはうす汚れたエプロンがけの主婦たちの姿が右往左往した。下宿・アパートも學生が後に續かないため、産業戰士の宿舍となつて北白川界限は作業服をつけた人びとの團體行動が人目を引いた。大學のうちに華やかな女子事務員の姿が目立つて多くなつたのもこのころからである。

十九年から二十年にかけては戦局の苛烈さは完全に學園を支配した。二月には文部省は軍事教練の徹底化をはかり、軍事教習科が設置されて初級士官としての指揮能力を一段と向上せしめることを決定した。一言でいえば國民學校は少年兵の搖籃、中等學校は幹部候補生の修練道場、大學・高專は予備士官學校へとその性質を近づけられたのである。

新入の學生はたいてい半年に満たないで兵役についたが、残るものは勤勞奉仕に動員されて工場および農園に赴いた。十九年の一月には文學部の學生は滋賀縣野洲郡中州村へ、三月には同甲賀郡岩根村へ土地改良作業に出動した。ついで同年五月からは法經の學生とともに宇治の火藥製造所に赴き、苛酷な勞働に身を投じ、一部は豊川の海軍工廠に赴いて軍需品生産勞働に従事した。二十年に入つて豊川部隊が引揚げてのち終戦までは、經濟學部の學生とともに滋賀縣の今津に赴き、開拓事業の援助に奉仕した。工場への勤勞動員は精神的にも肉體的にも過勞を強いられたが、今津でのそれは農民たちの手傳いでもあつたため割合に食糧關係もよく、空氣も新鮮で健康には惡結果はもたらさなかつたようである。しかもこの間可能な範圍で餘暇には受講・勉學することが定められていたが、實

際問題としてはそれは到底行ない得べきものではなかつた。學内においても殘留教授によつて授業が行われることにはなつてはいたが、これも實際問題としては學生がいけない場合が多いので効果はほとんど期待することができなかつた。そのころの學生の餘暇は召集について話しあふことか、食糧を求めて町を彷徨ふこと以外にはほとんど費されるころはなかつたのである。

五 新しき出發

第三期すなわち終戦後から現在に至る約十年間は大學がもつとも激しく變貌したときであり、それとともに學生生活には苦難の連續した時期である。

終戦後の大學の異風景はカーキ色の軍服・作業服に軍靴をはいた學生の氾濫である。大陸より、南方より、あるいはまた内地の各地方より學生は母校に戻つたが、かれらの眞理探求の生活は困難をきわめたものであつた。正しい思想、誤りない眞理を求めて若い人びとは大學の門へ殺到した。二十一年三月の文學部の志願者は收容豫定の三倍半、七一四名を數え、そのうち専門學校出身者が四割、高師出身がこれにつき、軍關係は比較的少ないが、女子の志願者は五六名もあつた。そのために入學試験は文學部としては前古未曾有の激烈な競争となつたが、このときは各學部とも大なり小なりその志願者の數は増大した。しかしこの競争を突破して入學したものの、生活の上での困難は緩和されるはずはなく、一個の黒パン、一杯のおかゆで生命をつなぐ悲惨さに、大學當局はこの年の夏期休暇は繰上げて六月十七日から八月末までと決定した。

しかし郷里に歸つても親のもとでゆつくりと靜養できるものは幸福の部類に入る。自らの生活を立てねばならぬ

學生は、休暇中でもアルバイトに炎熱の下を東奔西走しなければならなかつた。角帽をかぶつたアイスクャンデー屋が京都驛で超満員列車の到着ごとに危かしげに立ちまわるのは旅人の哀愁をそそる風景であつた。學生としてこのような職に就くのはプライドの抛棄を意味するものとは知りながら、プライド云では生きてゆけないことが現實の状態であつた。「行き過ぎである」との一部の冷い批判にも堪えて彼等はその生活力を頼りに黙黙と困難な時期を生き抜いたのである。

この年十一月の學生生計調査では一か月の學費總額は調査對象學生約七〇〇名のうち四〇〇—五〇〇圓のもの三二%、三〇〇—四〇〇圓が二七%、五〇〇—七〇〇圓が一九%で、四三〇—五三〇圓の生活が標準的なものとして考えられる。勿論授業料・諸會費はこれに全く含まないでの上の話である。これを同年五月の調査と比較すると約六〇圓内外の昂騰であり、激烈なインフレの昂進に悩む學生の姿が眼前に髣髴する。學費の内譯も總じて七〇%以上が食費、書籍費は一五%、娯樂費は一五%という數字が出、食費のみで大部分が消費されていることを示している。全国的に見た場合學生の犯罪、闇商人化は各地に存在したが、文學部に關してはそのような事實が割合に少なかつたのは最低生活にあつても精神の健全であることを證明するものであろうか。

なおそのころの記録に「意氣揚揚とどこどうして手に入れたのかとにかくも新しい角帽をかぶつた新入生」などとあるように、當時は角帽をかぶる學生は少なかつた。現在でも角帽をかぶるものは戦前に比べて甚しく減少したが、それは戦後の引き續いての現象であらう。

また戦後の異風景の一つは女子學生の入學である。本學には終戦前には女子學生というものは絶えて存在しなかつたが、戦後の教育の機會均等と男女共學の風潮は本學にも彼女らを若干名迎えるようになった。二十三年戦後の荒蕪しい空氣の中で、文學部ではある男子學生が女子學生を殺害するという陰慘な事件が起つたが、この事件は大學における男女共學の理念をなら變化させる意味をもつものではなかつた。全體から見れば女子學生の數は本學

でははなはだ少なく、中には戀愛・結婚のプロセスをたどるものもあるが、一般には、とりたてていうほどの華やかな男女交際は行われていない。最近では女子學生は文學部と醫學部藥學部に集中する傾向を見せているが、文學部には最初から他の學部に比して數多くの女子學生が在籍しているのである。

さて戦後の學生生活史でもつとも注目すべきものは學生運動の擴大發展である。すでに二十四年に厚生女學部問題というのが起つたが、これは當時附屬醫院の厚生女學部の卒業生のうち若干名を醫院が採用を拒否した事件である。職員組合がこれに抗議したことに端を發し、一部の學生が熱心に應援し、院長に採用ならびに就職斡旋を約束させた。その形式は勞働爭議の解決法とほぼ似たものであつたため、大學當局は大學行政への干渉として全面的にこれを拒否し、指導的役割を果した六名の學生を處分した。

學生自治團體たる學友會はすでに昭和十七年に戰時體制的な同學會に改組されていたが、戦後二十一年十二月に名稱はそのままで内容は學生の自治を大幅に認めたものに根本的改革が施された。二十四年末に同學會は代議員選舉を行なつたが、その顔ぶれは左派が壓倒的優勢を占め、この状態はその後改選再建のたびに事實となつて現われた。以後の學生運動の激烈化は當然そのころから豫想されなければならぬものであつたのである。

二十五年ころから内外の状态は「逆コース化」といわれる具體的な政治事實を現わし、學生の抵抗運動は活潑化した。二十五年六月京都市は公安條例を定めたが、それは集會・集團行進および集團示威運動に關して公安委員會の許可を必要とすることを定めたものであつた。これらの學内への適用については、大學は所轄の川端警察署との間にも充分な了解が取りかわされた。學内の集會については公安委員會の許可なしに、學長の責任において、自由にこれらを行ない得ることが認められ、この結果學内集會規程・揭示等規程の改正が行われたが、學會・講習會などの關係特定人を對象とする場合および映畫會・音樂會・演劇などで單に映寫・演出のみを行なう場合のほかは學外者の参加は許されることが明示された。結局、學内の集會は大學が自身で決定できると同時に學外者を入れない

いから、これらのことに關する限り警察署もその權力を行使しないことが、兩者の間に約束されたのである。以後學生の集會はみなこの規程に従つて開かれることになつたが、事實は學生の會合が規定を守らないで行われることがあり、それについての大學當局の學生に對する處置がしばしば事件をひき起すのである。

二十六年九月にはサンフランシスコで今次大戰の後始末として對日平和條約が締結された。しかし共產圏の國國はこの會議に参加せず、それらとの國交恢復は無視されて、全面講和を希望する人びとは、これに對して極めて批判的であつた。三月ごろにすでに京大全面講和促進委員會が同學會に設置されたが、多くの教官職員の支持を得て五月二十三日には法經第一教室に二千人の學生を集めて京都大學平和大會を開くまでに發展した。この勢に乗つて十月ごろにはサンフランシスコ條約批准反對闘争は最高潮に達したが、文學部では同月十六日學生大會を開き約一二〇名ほど集り批准反對を決議、二十日には反對のストライキを行なうことを可決した。すでに大學としては、二十五年十月十六日に告示第九號を以て學生のストライキを禁止していたから、當然この時の責任者三人は停學處分をうけたのである。

二十六年十一月十二日には本學に天皇陛下の行幸があつたが、このとき有名な天皇事件が起つた。すなわち陛下の御料車が正門に入るとき某新聞社の宣傳カーは君が代のレコードを放送したが、これに對して學生は「平和の歌」を高唱し、その空氣に支配されて警官隊がぞくぞく學内に入つた。これが學生を著しく刺戟し陛下が本部に入られたあとにその御料車を圍んで激しいデモを敢行した。別に十一月の文化祭を何日に行なうかについて大學當局と同學會との間に話し合いがつかず、一部の學生の氣分が相當尖鋭化していたことも事實である。大學は十四日に「今回の行幸に際し一部の學生により混亂がひきおこされたが、これは大學に對する社會の信頼をうらぎるもの」であるとし、同學會の解散を命じ、十七日には同學會中央委員八名を無期停學處分に付した。天皇事件は社會に對する反響が大きく、衆議院の法務委員會でも調査の對象とされた程であるが、學内でもこれを學生輔導に責任ありとし、

機構の改革が考慮された。このとき學生側からの要望もあり、問題處理に圓滑を缺く從來の補導委員會は廢止され、各學部教官から一名ずつ選ばれた學生部委員が學部の統一的意見を反映して補導事務官とともに責任をとる新たな學生部委員會が設置された。また各學部でも補導委員を若干名選び學部補導委員會を構成して學部内の問題はここで處理することに定められた。いわば補導の中心は學部に移行されたのであるが、文學部では特にこの問題に關心をもち、補導機構改革審議會を作つて教官側の五名の補導委員と六名の學友會委員が會合し、問題について熱心に討論し、二十七年二月に學友會の組織會則案などを新たに作成した。

二十七年の春には破壊活動防止法制定が國會でとりあげられたが、この法はかつての治安維持法に類するものとして世論の批判は嚴しく學生も反對運動を熱心に行なつた。この法が嚴格に適用されると思想運動に干渉が入り、學生運動そのものが相當制御されることを彼らは感じたからである。學内では各學部の自治會が反對運動に入り、文學部では四月三十日學生大會を開きストライキを決議した。また五月一日には圖書館前に一部の學生が不許可集會を催し學内示威行進を行なつた。文學部の學生大會は勿論この全學學生大會にも指導的役割を果したのは文學部の學生であつたため、當然大學は責任者として文學部の學生三名を停學處分にした。六月四日にはふたたび學生大會が開かれ、破防法についての全學懇談會の開催、學生の處分反對の要求を決議し、服部學長に要求書を提出した。しかし學長はこれに對して「大學人として研究活動を停止することは望ましくない」という揭示を出し、學生の反省を促す態度をとつたのみであつた。憤激した文學部の一部學生は六月十九日午後一時二十分から學長室の前に他學部の學生をも交えてハンストを含む坐りこみを開始した。文學部の補導委員は午後七時に現場に赴き當面の問題について話し合いをし坐りこみ中止を勸告したが、學生たちは全く聽入れなかつた。數日にわたる教授會が開かれ事態の拾収に努めたが、二十四日の學生大會はついに戦術を轉換しハンストを解くことを決定した。この間の文學部教授會の動きは事件處理に大きな役割を果し、特に數名の教授はほとんど徹夜の連續で問題ととりくみ、學内

外の人びとに深い感銘を與えた。結局この事件は十二名譴責という軽い處分で終止符を打つたが、それは「問題が破防法であり學生の眞剣な惱みから出た行動であることを了解、諸般の狀勢を考へて」決定されたものであつた。



昭和二十九年のメーデー風景

二十八年の十一月には全學連後援の全國學園復興會議が京都で開催されたが、その準備會は會議の初日八日と最終日十二日を京大で開催することを申込んできた。しかし大學當局はこれを許可せず、九日には學生は抗議集會を無許可のまま法經第一教室で強行した。十一日には立命館大學のわだつみ像歡迎市中行進に参加しようとした本學學生團と中立賣署員が荒神橋に衝突し、學生多數が河原に轉落して負傷者を出した。いわゆる荒神橋事件であつて、このアクションは著しく學生の憤慨を高めた。十九日には時計臺トにおいて市警に對する抗議大會がまた無許可のまま開かれた。一連のこれらの事件に大學はついに十一月二十九日それら集會の責任者に對して一名放學、三名無期停學、二名譴責の處分を發表し、同時に告示を出して一黨一派に偏する活動を禁止、同學會役員中から被處分者を出したことに對して學生自治の在り方に警告を發した。これに對し同學會は反駁聲明書を出し、さらに抗議集會を行ない、各學部學生大會は處分反對の強硬な態度をうち出し、若干の學部ではストを決議した。すなわち吉田・宇治分校が無期限ストに突入し、文學部もストを決議したが、國史の四回生は同期生のうちから放學者を出しただけにこれまた無期限ストに突入した。一方服部學長はうちつづく學生問題の處理に健康を著しく害し、すでに辭表を提出していたので、十一月二十三日には法學部の瀧川教授が選ばれて次代の學長に就任

した。新學長は就任匆匆ストライキを止めることを要請したが折しも冬期休暇にかかり、二十九年初頭の三學期には學生も平常通り登學して學園は平靜な状態に立戻つた。

二十九年の十一月には秋季文化祭が開催されたが、そのとき學生代表は大學の再三の勸告および禁止を無視して、二回にわたり學外者を交えて不許可の屋外集會を強行した。大學はこれに對して告示をもつて同學會に猛省を促したが、越えて三十年六月の創立記念祭のときには特に自重を要望したびたびの助言指導を行なつた。しかし同



警官によつて總長室前から退場させられる學生

學會代表はこの屋外集會、哲學學生ゼミナル、記念祭のリクリエーション化などについて主張を譲らず、五月二十三日および六月三日には總長と直接會見したが、總長は依然としてこれを許可できないことを説明した。六月三日の會見は午後一時から二時まで行われたが、二時半ごろ總長が歸宅しようとして本部の建物を出た際多數の學生が總長を取囲みもみあい、總長は止むを得ずふたたび總長室に引き返した。學生たちはこれを追つて總長室階下に集つたが、總長はギリシアの國際會議へ出席のため翌日は京都を出發せねばならなかつたから、大學は理由をのべて學生たちに即時解散を勸告した。しかし同學會代表たちはこれらの解散に努めず、參集學生に同調して總長自らその場に來て説明することを強要し喧騒をきわめる状態に陥つた。午後九時前に大學は、九時二十分までに解散しなければ不法集會と見なすことをいつたが、これを聞いた學生たち百數十名は逆に總長室前に亂入した。やむ



昭和三十一年園遊會風景

を得ず大學は警官隊の出動を請い、警察の力でようやく総長は行動の自由を恢復したのである。當然同學會には解散命令が下り、記念祭およびその行事は禁止され、責任者は一名無期停學、七名六か月停學の處分を受けた。無期停學者は文學部の學生であり、暴行事件の責任を問われたものであるが、暴力行爲の容疑で、問題は現在は司直の手に委ねられている。この事件は學内問題から起つた點で従来の諸事件と性質を多少異にするが、総長が自己の大學内を自由に歩き得なくされたという點で、世論は學生に對して極めて冷やかなものがある。

三十一年の五月二十五、六日は創立記念祭が行われたが

二十六日は長く中絶されていた園遊會が開催され、吉田分校で總長代理内野教授をはじめ約二千人の學生が集つた。餘興に六齋念佛踊や謠曲があり、ビールのジョッキを片手にした教官・學生の交歓が至るところに見られて和氣霽とした雰囲気のみなごり會は盛況を極めた。しかし學者の入场は許可せられず、守衛の検査によつて、家族・ガールフレンド



昭和三十一年園遊會に集まつた文學部教官と學生

ドまでが會場入口で別れさせられるのは見ていてもなはだ殺風景なものであつた。

同學會の再建については三十一年六月に各學部自治會代表が會合して話合いが進められている。しかしその成立がいつごろになるのかはいまのところ全く見通しはつかない状態である。思うに學生が時代の動きに敏感であり、批判精神が旺盛であることは古今東西を通じての事實である。しかし戦後特に學生運動が盛んであるのには實は深い理由がなければならぬ。昭和六年以降の「非常時」、第二次大戦には好むと好まざるとにかかわらず學生は國家と民族を特に考えざるを得ない立場におかれた。しかし戦時中には國家主義のもと自己の犠牲が國家を救い、民族を發展させる基礎であると教えられ、また自らもそれで納得して彼等は死地に赴いたのである。しかし冷酷な敗戦の事實は單に國家・民族のみならずそのもとにある社會を自己のものとして直視することを學生に要請した。彼らは國を憂えれば憂えるほど、わが國の社會矛盾に憤りを發し、その解決へと向つて力を集中させざるを得なくなつた。敗戦前においては學生はすべて國家權力のもとに「愛國者」であることを強制されたが、それは愛國の何物であるかを心から考えさせ、戦後の強力な學生運動の展開の契機となつたのである。學生の政治意識は戦前とは比較にならぬほど高まつている。その手段は激烈であり、ややもすればそれは他に累を及ぼして學生内部からも中央部の浮き上りの批判が公然と行われることがある。勿論中には特定の組織の指令通りにのみ動くものもいるであろうが、運動に参加する大部分の學生の心情は清純であり、斷固たるものの存在するのをわれわれは充分認めなければならぬと思う。文學部の學生は戦前・戦後の學生運動の高まりには必ずその頂上にあらわれて重要な役割を果しているが、それは文學部特有の熱情的な批判精神の一つのあらわれであるのかも知れない。

しかし以上のような運動の激しさにもかかわらず、數の上からは必ずしも學生の運動にたずさわるものが多くないことも事實である。三十年五月の宇治分校での調査によると「自治活動には關心をもち意義も認めるが、現状の自治會に對しては疑念があり自分は積極的に活動しない」という考えを表わした統計が出ている。さらに三十一年

五月吉田分校學生約七〇〇名に對するアンケートでは「マルキンズムを支持するか」に對して「消極的支持」が三六・二%、「わからない、無答」が三七・四%を占めている。もつとも自治活動の強力な分校でこの結果であるから、全學的に見た場合、結果的にはやはり傍觀的な立場をとる學生の數は相當多いものと見なければならぬ。しかし同じアンケートで「支持する政黨」については「社會黨」五二・六%、「自民黨」三・六%、「なし」が二・九%を占めて社會黨支持者は自民黨支持者の約十四倍に當つてゐる。現在京大生の思想動向はこれによつてほぼ大體のところは察しがつくであらう。

なお戦後學生の一つの特徴は學力の低下である。戦争の影響をうけた復員學生たちの學力は當然高くあるはずがないのであるが、つぎに述べるように經濟生活の悪化は一層彼らの勉學を妨げたから、この問題は一朝一夕に解決される問題ではなかつた。特に新制大學が始まつてからはその入學生たちが舊制高校同様の學力を持つことは當然困難であるし、大學もこの實情に應じた授業體制を新たに構想せざるを得なくなつた。しかし最近の學生は激烈な選抜競争に堪えてきている故か素質もよく、また熱心に勉學する者が多く、戦後十年にしてそのレベルは戦前に近いものに戻つたとの感を深くする。

つぎに經濟生活について若干述べる。二十四年に來朝したアメリカのドッジの勸告に従つて、その後の日本經濟はようやく戦後の悪性インフレから脱することができた。物價の高騰は止まり、一般に經濟生活は乏しいながらもやや安定した状態に移行した。學生の生活も消費の面では少しく落着いた感があるが、一方アルバイトの口は減少して生活の困難は一向解消されていない。三十年五月ごろの調査では一か月の所要學費は自宅通學者で二、三千圓臺のものが四〇%を占めてもつとも多く、下宿者では六、七千圓臺のものが五〇%以上を占めている。後者の場合は食費にそのうち五〇%を入れているから、通學者に比して地方より出てきたものの苦勞が思いやられる。なお寮生は數において少ないが、五、六千圓が八〇%を占め、二千圓から四千圓までが一七%を占めているのを見ると、

寮生活は下宿生活に比して相當恵まれたものといえよう。

戦後の學生生活の特徴であるアルバイトは金額の上では月千圓から三千圓の収入のものが七〇%近くを占め、人數の上では全學生の五分の一がアルバイトに従事していることになる。職種は家庭教師が歴倒的多數で、またこれは安定した學生らしいアルバイトとして彼らの間にも好まれていようである。京都という土地の關係もあつて映画のエキストラや祭の行列に古代色豊かに扮装して日當二百―四百圓をもらうこともあるが、これらは臨時的なものである。結局は大した収入ではない。

學生の經濟生活の困窮化に對しては戦時中に大日本育英會が設立され、全國の學生の援助に多大の貢獻をしたが戦後はこの會の活動はとみに活潑化した。本學でもこの會の援助を受けるものは多く、二十六年以降は在學生全體のほぼ半ばが獎學資金の交付をうけている。文學部においてもやはり半數近くがその恩恵に與つて勉學を續けている。現在では二千圓と三千圓の二種に分たれて、困窮の程度に應じて學生に與えられているが、その受領學生の數は半半程度である。また獎學資金は大學院學生にも與えられているが、修士課程では約三分の一、博士課程では相當數がこの給與をうけて熱心に研究に従事している。他の獎學會より資金の提供をうけて勉學を續けている學生もあるが、それらの會は育英會ほどの大規模な組織でなく、また資金の面でも決して大きなものではない。これらの獎學資金は與えられる金額からいえば最低所要學資の三分の一乃至二分の一にあたり、それだけでは決して學生生活に理想的な状態に導くものではないが、彼らの生活に相當程度の安定感を與えていることは事實である。

なお最後に注意しなければならないことは彼らの健康状態である。もともと本學は古くから校醫制度により囑託醫が週二回ずつ學生の健康相談および治療に應じていたが、大正十三年に學生課に學生健康相談所が開設され投薬處置料まで全部無料でこれを行なうことになつた。この種の施設は全國帝國大學のうち本學が最初に設立したものであり、昭和十三年ごろにはほぼ全科を整備して以後學生の保健に多大の貢獻をして來たが、この施設に集まるも

つとも多い患者は内科疾患のものでありわけても結核患者である。戦後は二十四年八月に會計課所屬として保健診療所と名をかえ一層内容は充實したものになつたが、やはり患者は、胸部疾患で注意をうけ治療につとめるものが多い。毎年定期的に行われる體格検査では、新制大學設置以來大學院を含めて在學生總數約一萬名のうち六千乃至七千のものが實際に検査をうけているが、總數の一―四％の要養護者が出ており、二十六年以降はその數は漸増の傾向がある。しかも文學部は各學部と比較するとき要養護者は毎年最高のパーセンテージを占めている。最近戦後の混亂と虚脱もおさまり、學生の學力は漸次向上し、關係者はこれを極めて喜ぶべき現象としているが、一方にその健康が必ずしも樂觀できない状態に陥りつつあるのは文學部としては遺憾に堪えないところである。

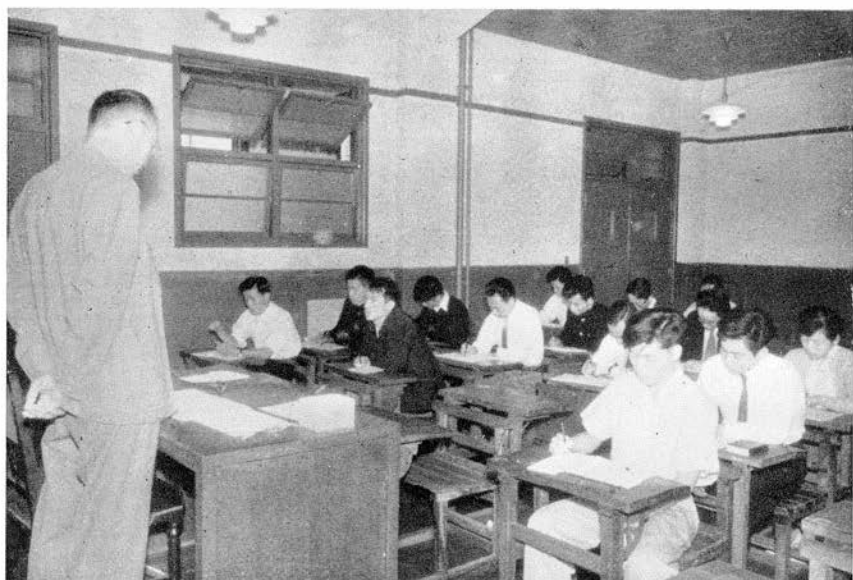
一般的に見ると、文學部の學生は一人一人が孤立する傾向が強い。専攻が二十五種に分れているのもこれを助長する一つの原因であろう。學部全體が一つの集團としてうちとけるといふ空氣がなく、また事實そのような機會も多くはない。しかし學問がほとんど内省的な性格のものであるためか、自己省察の傾向は強く、獨特の個性を持つ學生は少なくない。それは創立以來の文學部の學生の一般的な傾向であるが、それが、普通は多くもない學生大會を定員不足で流會にすると同時に、一旦ほとぼしるときは學生運動の指導者を續續生み出す原因にもなるものなのであろう。孤立化に對する反省として最近グループ活動が盛んになつたが、それも限度があり、ある程度以上の擴がりには至らないで終るようである。文學部特有の孤立的な學生の性格は今後も當分はなほだしい變化は受けないままにしばらくは繼續するのではなからうか。

文科大學第一回のある卒業生は三年の學生生活を回顧してつぎのようである。

黒煙ものすごい煉瓦の煙突を旗じるしとして、せわしきピストンの音、眩きエレキの光に物質的文明の領土の廣さを誇れる理工科大學の建物に對して、我文科大學は立てり。粗造にして哀れなる小さき教室の、而も寂寥として靜かなれば、不可思議なる人間精神の力に氣附かぬものには其存在だに認められざるべし。然れども人

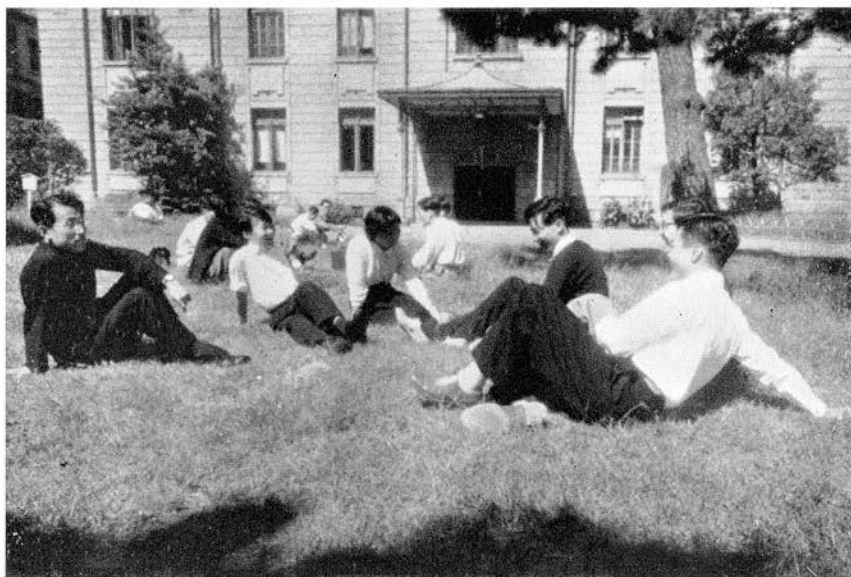
はパンのみにて生くるものに非ず。社會活動の原動力たる精神的文化の精粹は此無音の泉より流れ出づるものなるを知らずや。

もとより理工科大學の建物は早くから焼失していまはなく、従つて「黒煙ものすき煉瓦の煙突」も現在はない。文科大學の「粗造にして哀れなる小さき教室」はいまや鐵筋コンクリートの堂堂たる建物に變つてゐる。しかし宏壯な法經の四階建の大樓と蜿蜒と横たわれる工學部・理學部の諸建築の間に文學部は依然として「寂莫として靜かに」その存在を示している。しかして五十年の歴史はめぐつてもこの第一回生の表明した意氣はそのまま未だに文學部學生の一般的傾向として引き繼がれてきているようである。あるいは人間存在の根本を探り、あるいは人間の歩みを考え、あるいは人間の多面的な姿の奥にひそむものをつきとめる、そしてそれらのうちに自らの道を探求することに於いて文學部の學生は依然として創立以來の眞理への情熱を現在に保持してゐるのではなからうか。



授 業

昭和三十一年九月



憩 い

昭和三十一年九月